



姑獲鳥の夏

目から鱗

とある病院の娘が、20ヶ月もの間妊娠したままだという——駆け出し小説家の関口巽がそんな噂話を聞いたことから、この物語は始まる。
ひょんなことから件の病院、久遠寺医院で起こった一連の怪奇事件に関わることとなった関口は、やがて謎多き久遠寺家の人々や、一家にまつわる古くからの言い伝えに深く踏み込んでゆく。久遠寺の呪われた「血」とは一体何なのか——文字を追うにつれて、いつしか読者も、関口とともに物語の世界をさまよっているかのような感覚を覚えることとなる。

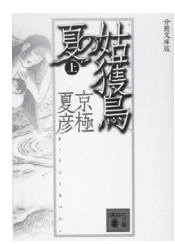
この物語は推理小説としての面だけでなく、伝奇小説の味わいも持つ。読者はときに背筋をぞくりと震わせ、物語中で起こっていることの何が思い込みで何が事実なのか分からなくなる。物語中に漂う面妖な雰囲気、それが『姑獲鳥の夏』の魅力の一つだ。

また、多彩な登場人物も欠かせない。古書店店主にして陰陽師である中禅寺秋彦、他人には見えないものが見える私立探偵の榎木津礼次郎、久遠寺家の娘で「危なげな美しさ」をもつ久遠寺涼子。このような癖の強い人々が互いに交じり合うことにより、物語の醸し出す不思議である種不気味な世界観がいつそう強調されている。

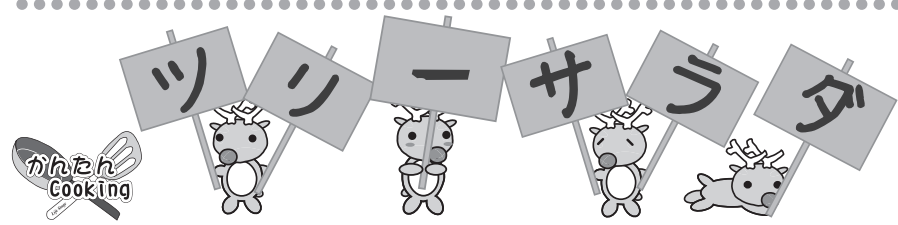
物語を読み進めるうちに、読者にじわりと伝わってくるものがある。子を思う母の心だ。子を育てたいという真摯な思いが、ときに母を狂気じみた行動へと導いてしまう。断ち切れぬ久遠寺の「血」の呪いと母の思いが絡まりあって、いくつもの悲哀を生む。
果たして、関口たちはこの悲哀の連鎖を断ち切ることができるのか。

この作品は著者のデビュー作であり、発表以来多くの読者を虜にしてきた。独特の世界観や登場人物からなる『姑獲鳥の夏』は、普段小説を読まないという人にもおすすめしたい作品だ。
一度本を開けばページを繰る手が止まらなくなるこの物語の世界に、ぜひどっぷりと漬かってほしい。

(うむ)



分冊文庫版 姑獲鳥の夏 (上) (下)
著：京極夏彦
講談社文庫



材料 (4人分)
 ジャがいも (中4個)
 ブロccoli (1株)
 プチトマトなど (飾り用)
 マヨネーズ (大さじ4)
 塩こしょう (適量)

- ① ブロccoliはラップをして電子レンジ (500W) で5分加熱する。
- ② ジャがいもは①と同様に10分加熱して皮をむいてつぶし、マヨネーズと塩こしょうで味を調える。
- ③ ②を細い円錐状に盛って、小さく切った①を刺し、爪楊枝でプチトマトなどを飾ってできあがり。



盛りつけのコツ
 ☆②はかなり細めに盛ろう！
 ☆ブロッコリーは小さめに！
 ☆上の方は飾りを少なめに！

はみだし
すてーじ

国勢調査には正直に「主に仕事」と書いた。
⇒私は未提出だったため最後通牒の文書を受け取りました。

(E・2 ケンタロス)
(提出が法律で決められているなんて；編)